

## プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

オリンピックにちなんだ躍動感あふれる音楽を  
マエストロ広上の指揮で

今回の「平日の午後のコンサート」は、来る東京オリンピック・パラリンピックにちなんだ＜勝利に向かってGO!＞。前回の東京オリンピックの音楽や、士気を鼓舞するようなクラシック音楽が演奏されます。

1964年10月10日、東京・国立競技場に集まった73,000人の観客と、テレビを介した世界中の人々が注目する中、第18回オリンピック東京大会の開会式が行われました。今回はまずその際に皆の心を躍らせた開幕のファンファレと入場行進のマーチが披露されます。続く『ガイーヌ』は闘いへの意気上がる勇壮な音楽。『アイーダ』の“凱進行進曲”は勝利の行進であり、またサッカー日本代表の応援曲でもあります。最後の『火の鳥』は「不死鳥」。不屈の精神に通じる「火の鳥」は女子バレーボール日本代表の愛称にもなっています。

広上淳一の持ち味である生氣と躍動感は、こうした音楽にジャスト・フィット。そのダイナミックな演奏で、気分を大いに高揚させましょう。



今回のテーマは“勝利に向かってGO!”。ダイナミックな演奏をお楽しみください

©上野隆文

## 1964年の東京に鳴り響いた オリンピック・ファンファーレとマーチ

幕開けは、**今井光也**（1922－2014）の「**オリンピック東京大会ファンファーレ**」。1964年大会を印象付けたこの曲は、1962年に公募で選ばれました。今井光也は、三協精機に勤務する傍ら長野県の諏訪交響楽団の指揮者を務めていた人物。曲は僅か8小節で、意外にも短調の作品です。それゆえ「東京オリンピック・マーチ」を続けた場合に、明るいマーチ（特に出だし）を引き立たせる効果もあるようです。

続く**古関裕而**（1909－1989）の「**東京オリンピック・マーチ**」も、1964年大会で多大なインパクトを与えました。古関は、5,000曲もの作品を残し、“和製スーザ”とも呼ばれた昭和の名作曲家。夏の甲子園の大会歌「栄冠は君に輝く」、NHKスポーツ中継のテーマ「スポーツショー行進曲」といった誰もが耳にしている音楽や、阪神タイガースの「六甲おろし」、読売ジャイアンツの「闘魂こめて」、早稲田大学の「紺碧の空」、慶應義塾大学の「我ぞ覇者」などの応援歌も彼の作品です（巨人&阪神、早稲田&慶應 ―順番に深い意味はありません― の応援歌が同じ作曲家であるのも面白いところです）。古関はこのほか、「長崎の鐘」「君の名は」「高原列車は行く」「モスラの歌」など多くの名作を書いた偉大な作曲家でした。ちなみに、2020年春スタートのNHK連続テレビ小説では、彼の半生が描かれるとのこと。

第二次大戦中の軍歌作曲を悔いていた古関は、平和の祭典の行進曲を依頼されて、いたく喜んだといいます。そんな彼が精魂こめて作曲し、開会式の選手入場の際に演奏されたこの曲は、騎馬風のリズムを用いた澁刺たる音楽。マーチ主部に優雅なトリオが挟まれ、最後に「君が代」の一節が登場します。



2020年東京オリンピックへ向けて完成した国立競技場

## 荒々しさと哀愁が同居する

### ハチャトゥリアンの魅惑のバレエ音楽から

かわつては、旧ソヴィエト連邦の民族主義音楽をリードしたアラム・ハチャトゥリアン(1903-1978)のバレエ音楽『ガイヌ』の楽曲。アルメニア人だった彼は、コーカサスの民族音楽を取り入れた、野性的かつ色彩的な作品を多く残しました。その作風を代表する『ガイヌ』は、1939年作のバレエ『幸福』の音楽に基づいて1942年に作曲され、同年初演されました。この時は、コルホーズ(旧ソ連の集団農場)の娘ガイヌが、国に対する夫の裏切りを告発し、国境警備隊長と結ばれるといった物語。激しいリズムと哀愁が同居したアルメニアの民族色濃厚な音楽は、作曲者の名声を一躍高めました。しかし1957年にモスクワのボリショイ劇場で上演される際、台本と音楽を大幅に変更。今度はガイヌと恋人や友人たちの愛と友情の物語になりました。そして現在は、もう1つの代表作『スパルタクス』に比べてバレエ自体の上演が少なく、もっぱらコンサートのレパートリーとなっています。

コンサートでは適宜抜粋しての演奏が通例。今回は公演の趣旨を鑑みて、力強い楽曲を中心とした5曲が選ばれています(以下、ボリショイ劇場版に準拠)。“序奏”は、打楽器の連打と金管のファンファーレに始まる冒頭部分。“友情の踊り”は、狩人2人の友情を描いた音楽で、3拍子のリズムが独特のムードを醸造します。おなじみの“剣の舞”は、勇ましいクルド族が戦いに向かう前に踊る舞曲。荒々しいリズムを持った音楽が、東洋風の部分を挟んで、畳み込むように展開されます。“バラの娘たちの踊り”は、狩人をもてなすために、乙女たちがバラの花を持って踊る、軽快に弾んだ音楽。“レズギンカ”は、若者たちが踊るコーカサスのレズギ族の舞曲で、太鼓の乱打が情熱を煽ります。



9世紀に建てられたタテヴ修道院は、アルメニアで最も美しい修道院といわれる

## アイダ・トランペットによる勇壮な旋律でおなじみ 華やかに響きわたる凱進行進曲



後半は、イタリア・オペラの巨匠ジュゼッペ・ヴェルディ(1813–1901)の歌劇『アイダ』より“凱進行進曲”で始まります。1871年に初演された『アイダ』は、スエズ運河の開通を記念して新設されたエジプトのカイロの歌劇場からの依頼による、ヴェルディの集大成的なオペラ。エジプトの奴隷となったエチオピア王の娘アイダと、エジプトの将軍ラダメスの恋に、エジプト王の娘アムネリスが絡んだ三角関係の悲劇です。

サッカーをはじめとするスポーツ・イベントでもおなじみの“凱進行進曲”は、全4幕中の第2幕第2場、エチオピア軍を打ち破った将軍ラダメスたちが凱旋するシーンで演奏される音楽。このために作られた楽器「アイダ・トランペット」のファンファーレと弦楽器の掛け合いに、堂々たる行進曲が続き、華やかに盛り上がります。



世界三大運河のひとつ、地中海と紅海を結ぶスエズ運河

## ストラヴィンスキーが時代に躍り出た出世作の組曲版 ドラマティックで色彩感豊かなサウンド

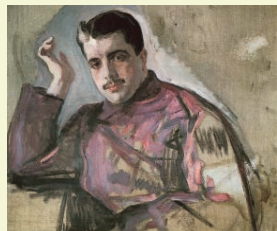


締めくくりは、20世紀音楽をリードしたロシア生まれの革新的大家イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882–1971)バレエ組曲『火の鳥』です。本作は、パリで旗揚げしたロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフの委嘱による、ストラヴィンスキー三大バレエの第1弾。1910年に初演され、無名の若手だった彼は、時代の寵児へと躍り出ました。



物語は、凶悪な魔王カステイの城に囚われていたツアレヴナ王女らを、イワン王子が火の鳥の力を借りて救い出し、2人は結ばれる……といったロシアの民話に拠るもの。音楽は、師リムスキー＝コルサコフ譲りの民族的色彩感と清新さにあふれています。なお、ロシア伝承の火の鳥は光に包まれた鳥。同義で用いられる「フェニックス」はエジプトの神話に登場する永遠の時を生きる鳥で、体に火を纏っています。ただし日本人の火の鳥のイメージは、手塚治虫の名作漫画に拠るところ大でもあります。

ストラヴィンスキーは、約50分の全曲から、1911年、1919年、1945年に3種の組曲を作成しました。その中では、2管編成で曲数も手頃な1919年版が多く演奏されています（今回も然り）。同版は“序奏～火の鳥の踊り～火の鳥のヴァリアシオン～王女たちのロンド（ホロヴォード）～魔王カステイの凶悪な踊り～子守歌～終曲”の7曲で構成。ほとんど切れ目がなく、最初の3曲は完全なひと続きです。前半は精緻な音楽が続き、ロマンティックな“王女たちのロンド”の後に激烈な“魔王カステイの凶悪な踊り”が登場。ファゴットがしみじみとソロを吹く“子守歌”を経て、7拍子の運びが特徴的な“終曲”で壮麗に結ばれます。



バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の創設者として名高い、セルゲイ・ディアギレフ（1872-1929）



古代エジプトの神話に登場する、フェニックスの原型とされる聖なる鳥ベンヌ



レオン・バクストによる主役「火の鳥」の衣装デザイン

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。